必ケヅリ氷ヲ可レ入、

芋粥

〔日用助食〕竈の賑ひ〕里芋粥

里芋がゆは、右飯を仕かけるより、水を多く入る計のちがひ也、しかし飯より米の洗ひかたまへめなり、芋のこしらへも同じ位、鹽も同じく入、始終釜のふたをとらざるやう、追々に火をほそめて焚べし、少し明て焚迄はくるしからねども、皆あけてたけば、粥の味ひ水くさければ、無二油斷一氣を付たけば味ひよろし、尤焚あげ暫蒸て食すべし、

甘藷粥

〔日用助食〕竈の賑ひ〕薩摩芋茶粥

米は未だ水の澄ざる位ざつと洗ひ、先茶を煎じ出し、其茶を釜に入、其茶の中へ米をいれ焚べし、煮あがる時右飯に入たる位に芋を切入、鹽も入て蓋を取らざる樣、次第に火をほそめて焚、米を二三粒すくひとりつまみ見るに、未だ眞はかたき位を度として火を引、熰も引盡し暫くむし置、釜より碗に盛て食すべし、〇略中京大阪堺にて冬分小人數の家にては、此粥を焚て食する也、

栗粥

〔空穗物語嵯峨の院二〕所々にみやれば、とほう火をたきて、その山のめぐりの山ふじにたにあり、ちかうみれば、火を山のごとくおこして、おほいなるかなへたて、くりをてごとにやきてかゆにさせ、よろづのくだ物くひつゝ、人々の御もとなる人にたびゐたり、

橡粥

〔貞丈雜記六飲食〕とち粥は、橡の木の實を粥の中へ交へ煮たるなり、太平記卷五に、大塔宮熊野落の條、十津川の民家に宮宿り給ひければ、栗飯、橡粥などを參らせし由見たり、

〔太平記五〕大塔宮熊野落事

大塔宮二品親王〇護良ハ、〇略中般若寺ヲ御出在テ、熊野ノ方ヘゾ落サセ給ケル、〇略中路ノ程十三日ニ十津河ヘゾ著セ給ヒケル、宮ヲバトアル辻堂ノ内ニ奉レ置テ、御供ノ人々ハ在家ニ行テ、熊野參詣ノ山伏共、道ニ迷テ來レル由ヲ云ケレバ、在家ノ者共哀ヲ垂テ、粟ノ飯、橡ノ粥ナド取出シテ、其